

倭学訳官崔瑠（伯玉）のハンゲル書簡より みた易地行聘交渉

岸 田 文 隆

はじめに

江戸時代、日朝間に往復した朝鮮語ハンゲル書簡は、従来長正統氏によって紹介された8通のみが学界に知られていたが¹、2009年および2012年に対馬宗家文庫の一紙物目録および追録が上梓されるにおよび²、100通余りの新たな書簡類の存在が明らかとなった³。これら書簡類の多くは、1811年の通信使易地行聘の外交交渉の舞台裏に関するものであるが、官撰の記録類からうかがい知ることのできない、新たな事実を伝える好個の資料群である。就中、最も衝撃的な資料は、1805年9月6日に受賄売国の咎により倭館前で処刑されることになる倭学訳官崔瑠（伯玉）⁴が、その2か月余り前の6月22日に流配先の全羅道長興府から倭館の朝鮮語大通詞の小田幾五郎に宛てて秘密裡に送った書簡⁵である。この書簡は、発信者の名前が露見しないように、発信者欄が「無名氏」となっているのみならず、書簡を12片の細い紙片に分け、各紙片を撚り合わせてこよりにし、そのこよりを銭をくくるひもに仕立てて、小通事金又得に運ばせたもので、極秘裏に送るための周到な配慮がなされている。発信者崔瑠（伯玉）の並みならぬ覚悟がその形態からも十分に察せられるが、奸訳として処刑されることになる当事者の直筆書簡として、官撰の記録からうかがい知ることのできない通信使易地行聘交渉の新たな一面を伝えているので、以下、その内容を紹介し、若干の解説を加えようと思う。

¹ 長正統（1978）。

² 対馬歴史民俗資料館編（2009）、対馬歴史民俗資料館編（2012）。

³ 対馬歴史民俗資料館編（2015）。

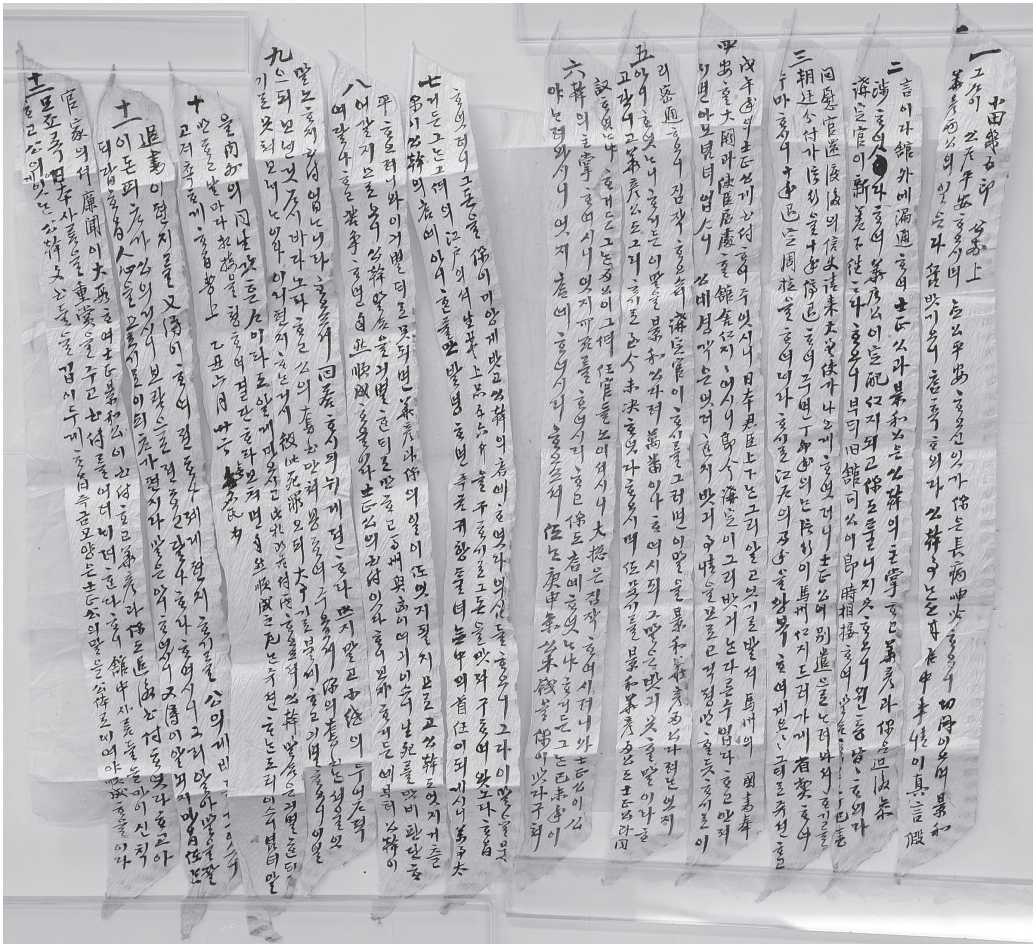
⁴ 朝鮮後期の倭学訳官。1760年生まれ。1795年（正祖19）式年試の時雑科（倭学）に合格した。字は伯玉、本貫は清州である。

⁵ 対馬宗家文庫史料一紙物〔管理番号61〕。対馬歴史民俗資料館編（2015）の史料40。

1. 定配地より小田幾五郎へ送った崔瑀（伯玉）のハングル書簡

まず、該書簡の写真、翻刻、和訳を以下に掲げる。

【写真】⁶



全体

⁶ 長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵。当資料の写真掲載を許可して下さった長崎県立対馬歴史民俗資料館に甚深の謝意を表する。

一 田餘各印 家上
 二 涉之
 三 期
 四 期
 五 期
 六 期
 七 期
 八 期
 九 期
 十 期
 十一 期
 十二 期
 十三 期
 十四 期
 十五 期
 十六 期
 十七 期
 十八 期
 十九 期
 二十 期
 二十一 期
 二十二 期
 二十三 期
 二十四 期
 二十五 期
 二十六 期
 二十七 期
 二十八 期
 二十九 期
 三十 期
 三十一 期
 三十二 期
 三十三 期
 三十四 期
 三十五 期
 三十六 期
 三十七 期
 三十八 期
 三十九 期
 四十 期
 四十一 期
 四十二 期
 四十三 期
 四十四 期
 四十五 期
 四十六 期
 四十七 期
 四十八 期
 四十九 期
 五十 期
 五十一 期
 五十二 期
 五十三 期
 五十四 期
 五十五 期
 五十六 期
 五十七 期
 五十八 期
 五十九 期
 六十 期
 六十一 期
 六十二 期
 六十三 期
 六十四 期
 六十五 期
 六十六 期
 六十七 期
 六十八 期
 六十九 期
 七十 期
 七十一 期
 七十二 期
 七十三 期
 七十四 期
 七十五 期
 七十六 期
 七十七 期
 七十八 期
 七十九 期
 八十 期
 八十一 期
 八十二 期
 八十三 期
 八十四 期
 八十五 期
 八十六 期
 八十七 期
 八十八 期
 八十九 期
 九十 期
 九十一 期
 九十二 期
 九十三 期
 九十四 期
 九十五 期
 九十六 期
 九十七 期
 九十八 期
 九十九 期
 一百 期

【翻刻】

一

小田幾五郎 公 前 上

그 스이 『隔』⁷ 公候 平安호오시며 『隔』 僉公 平安호오신잇가 僕は 長病 呻吟호오니 切悶이
오며 景和 / 華彦 兩公의 일은 다 꿈 맞기오니 춤혹호외다 公幹事는 近來 館中 事情이 眞言假

二

言이 다 館外에 漏通호여 土正公과 景和公은 公幹의 主掌호고 華彦과 僕は 追後 參 / 涉호엿
(_) 다 호여 華彦公이 定配々지 되고 僕도 풀니지 못호오니 원통답 〃 호외다 / 講定官이 新差下
往하다 호오니 부딪 旧館司公이 即時 相接호여 말슴호기를 丁巳春

三

問慰官 還渡後の 信使請來大差使가 나오게 호엿더니 土正公이 別遣으로 노력와서 호기를 /
朝廷分付가 信行을 十年停退호여 주면 丁卯年의는 信行이 馬州々지 드러가게 省弊호여 / 주마
호시니 十年退定 周旋을 호여니라 호기로 江戸의 多年을 왕복호여 게요 〃 〃 그딴로 쥬션호고

四

戊午年の 土正公게 書付호여 주엇시니 日本 君臣 上下는 그리 알고 잇기로 받서 馬州의 『隔』
國書奉 / 安 〃 大關과 使臣居處 〃 館舍々지 〃 어시니 卽今 講定이 그리 맞기는 다른 수 업다 호
고 안져 / 시면 아모 넘너 업스니 公네 싱각은 엇더흔지 맞기 事情을 모로고 걱정만 혼 듯호기
로 이

五

리 密通호오니 짐작호오쇼서 講定官이 호기를 그러면 이 말을 景和 華彦 兩公다려는 엇지 /
아니 호엿느니 호거든 이 말을 景和公다려 萬番이나 호여시되 그 말은 맞기 못홀 말이라 호 /
고 단니고 華彦公도 그리 호기로 至今 未決호엿다 호오시며 또 못기를 景和 華彦兩公도 土正
公과 同

六

議호엿느냐 호거든 그는 兩公이 그 忒 任官들노 이셔시니 大掾은 짐작호여시려니와 土正公
이 公 / 幹의 主掌호여시니 엇지 可否를 호여시리 호고 僕도 춤예호엿느냐 호거든 그는 己未年
이 / 야 노력와시니 엇지 춤예호여시리 호오쇼서 〃 〃 庚申條 公木錢을 僕이 맞다 구쳐

七

호엿더니 그 돈을 僕이 미양게 맞고 公幹의 춤예호엿다 의심들 호오니 그 다이 말을 못 / 거
든 그는 그 忒의 江戸의서 生蓼上品 五六斤을 구호기로 그 돈을 맞져 구호여 왔노라 호읍 / 僕
이 公幹의 춤예 아니 혼 줄만 발명호면 즉금 귀향 풀너 僉中の 首任이 되게시니 萬事太

八

平호오려니와 이 기별되로 못 되면 華彦과 僕の 일이 또 엇지 될지 모로고 公幹도 엇지 거
출 / 여 같지 모로오니 公幹 말슴을 기별호 되로만 호고 馬州 興凶이 여긔 이스니 生死를 맞비
판단호 / 여 달나 호고 苦爭호면 自然 順成호을이다 土正公의 書付 잇다 하니 보자 호거든 예부
터 公幹이

九

⁷ 敬意や謙讓の意を表す書法が施された語句の初めに、以下の記号を付した。

『移』：敬意を表すため移行法が施されたもの

『隔』：敬意を表すため隔間法が施されたもの

『右』：謙讓の意を表すため右側に書いたり、小さく書かれたもの

말노 ㅎ지 書付 업느니라 ㅎ오쇼셔 回答ㅎ시되 ㄴㄱ게 전ㅎ라 ㅅ지 말고 小紙의 두어 ㅈ 積/
오되 보닌 것 ㅈ시 바다노라 ㅎ고 公의 套書만 ㅅ 봉ㅎ여 주오쇼셔 僕의 套書는 셔울 잇/ 기로
못 ㅅ 보닌느이다 이리 편지 ㅎ는 거시 彼此死罪오되 大事기로 불게ㅎ고 弔別ㅎ오니 이 일

十

을 内外의 同生 ㅅ흔 ㅅ이라도 알게 마오시고 此札卽爲付丙ㅎ오쇼셔 公幹 말슴은 弔別ㅎ ㄷ
로/ 만 ㅎ고 날마다 相接을 청ㅎ여 결단ㅎ라 보치면 自然 順成之道는 ㅈ전ㅎ는 도리 이스니 ㄴ
너 말/ 고 ㅈ촉ㅎ게 ㅎ옵 暫上 乙丑 六月廿二日 無名氏 頓

十一

追書 이 편지를 又得이 ㅎ여 전ㅎ나 제게 편지 ㅎ기를 公의게 바들 것 이스니/ 이 돈 피차가
公의 거시니 보람으로 전ㅎ고 달나 ㅎ라 ㅎ여시니 그리 알아 말을 잘/ ㄷ답ㅎ옵 人心을 모로기
로 이 피차가 편지라 말은 아니 ㅎ여시니 又得이 알너지 마음 ㅅ는

十二

官家의셔 廉聞이 大段ㅎ여 士正 景和公이 書付ㅎ고 華彦과 僕도 追後 書付ㅎ엿다 ㅎ고 아/
모쪼록 日本사람을 重賞을 주고 書付를 어더너려 ㅎ다 ㅎ니 館中 사람들을 마이 신칙/ ㅎ고 公
의게 잇는 公幹文書들을 ㅅ이 두게 ㅎ옵 즉금 모양은 士正公의 말을 公体로 ㄴ여야 順成ㅎ을이
다

【和訳】

一 小田幾五郎様の御前に

その間ご貴殿ご平安であらせられ、皆様ご平安であらせられましょうか。私は長い病気で呻
吟しておりますので困ったことです。景和（朴致儉）/ 華彦（崔国禎）ご両公のことはみな夢
にも思わなかったことでむごいことでございます。御用のことは近頃（倭館）館中の事情が、
本当のこともうその

二 こともすべて館外へ漏れて、士正（朴俊漢）公と景和（朴致儉）公は御用を主掌し、華
彦（崔国禎）と私はそのあと関係/ したとして、華彦（崔国禎）公が定配にまでなり、私も
解かれないので、恨めしくてたまりません。/ 講定官（玄義洵（敬天））が新たに任命されて（東
萊へ）下ったそうですが、なにとぞ、旧館守様（戸田頼母）は直ちに相接なさっておっしゃる
ことに、「丁巳（寛政9（1797）年）春に

三 問慰官還渡後に信使請来大差使が出来するようにしたところ、士正（朴俊漢）公が別遣
として（東萊へ）下ってきて言うことには、/ 『朝廷の申しつけが、信行を十年停退してくれ
れば丁卯（文化4（1807））年には信行が対馬州まで入往するように省弊して/ やろうという
ので、十年退定の周旋をやりとげよ』と言うので、江戸に多年、往復してようやくようやくそ
の通りに周旋し、

四 戊午（寛政10（1798））年に士正（朴俊漢）公に書付してやったのだが、日本の君臣上
下はさよう心得ておるので、最早対馬州に国書を奉/ 安する宮殿と使臣の居処たる館舎まで
作ったのだから、ただいまにては講定はさようするほか仕方がない」と言って、座っていらっ
しゃれば/ 何の心配もございませんので、ご貴殿らのお考えはいかがでしょうか。外向き（朝
鮮側）の事情をご存知なく心配ばかりなさっているようなので、このように

五 密かにお知らせいたしますので、ご明察ください。講定官が言うことには、「それなら
ば、このことを景和（朴致儉）・華彦（崔国禎）ご両公にはどうして/ 言わなかったのか」と
言えば、「このことは、景和（朴致儉）公に何度も言いましたが、そのことは表立って言えな

いことだと / 言っていましたし、華彦（崔国禎）公もそのように言うので、今に至るまで未決なのです」とおっしゃってください。また、（講定官が）尋ねることには、「景和（朴致儉）・華彦（崔国禎）ご両公も士正（朴俊漢）公と同

六 議（一緒に議論）したのか」と言えば、「それは、ご両公がその時任官としておられましたので、あらましはお察しになられたでしょうが、士正（朴俊漢）公が御用 / を主掌なさっておられましたので、どうして可否を申すことができたでしょうか」とおっしゃってください。（講定官が）「私（崔珔（伯玉））も加わっていたのか」と言えば、「それは、己未（寛政11（1799））年になって初めて / （東萊へ）下来したのだから、どうして加わることができたでしょうか」とおっしゃってください。また、庚申（寛政12（1800））条の公木錢を私が預かって個別に処理

七 したのですが、そのお金を私が「미양계」（みやげ、贈り物）にもらって御用に加わったと（朝鮮側では）疑っておりますので、そのへんの話を（講定官が）訊ねたら、/ 「それは、その時江戸より、生人蔘の上品五六斤を求めてきたので、その金を預けて調達して来たのだ」とおっしゃってください。/ 私が御用に加わっていないことだけ弁明すれば、ただちに流配を解かれ、皆の中より首任になるでしょうから、萬事太

八 平でしょうが、この便りのとおりにできなければ、華彦（崔国禎）と私のことはまたどのようなになるやも知れず、御用もどのように差し支える / ようになるやも知れませんので、御用のお話はお便りした通りにのみなさって、「対馬州の興凶はここにあるので、生死をはやく判断して / くれ」としきりに争えば、自然と順調に成し遂げられるでしょう。（講定官が）「士正（朴俊漢）公の書付があるそうだから見よう」と言えば、「昔から御用というものは、

九 口頭でおこなうものであって、書付はございません」とおっしゃってください。（この手紙に対して）回答なさるには『誰かに伝えろ』と書かずに（あて先を書かずに）、小紙に二三字記すに / 『送ったものを委細受け取った』と書いて、ご貴殿のはんこだけ押して、封してください。私のはんこはソウルにある / ので、押さずに送ります。このように手紙を送るのは双方とも死罪なのですが、大事ですので、顧みずにご連絡いたしますが、このこと

十 を内外に弟同然の間柄でもお知らせにならずに、この手紙はすぐに火にくべてください。御用の話は、お便りしたとおりに / のみなさり、毎日（講定官との）相接を請うて決断せよと催促すれば、自然と順成の道には周旋するすべがありますので、心配なさらずに / 催促してください。まずは

乙丑六月二十二日 無名氏 頓

十一 追伸 この手紙を又得⁸をして伝えさせますが、彼に便りすることには、「ご貴殿（小田幾五郎）から受けとるべきものがあるのだが、/ このお金はともかくご貴殿（小田幾五郎）のものなんだが、（ご貴殿がお金を受領したということを）しるしでもって（私に）伝えてくださいと言え」と言いましたので、左様お心得になって話をうまく / 答えてください。人心はわからないので、これがともかく手紙であるという話はしていないので⁹、又得に告げないでください。また、

⁸ 小通事の金又得のこと。対馬宗家文庫史料一紙物^{ウツク}「812-8」に「小通事又得と申者」とあり、また、小田幾五郎「通訳酬酌」巻6の終丁に「小通事金又得という者を以」とある。

⁹ つまり、この書簡が手紙であることを隠すために、こよりにして錢をくくるひもに仕立て、メッセンジャーの小通事又得にはそれが手紙であるということは告げずに「金だ」と言ってわたしたのだと考えられる。

十二 官家より廉聞（密かに事情を問うこと）がたいへんなもので、「士正（朴俊漢）・景和（朴致儉）公が書付を書き、華彦（崔国禎）と私（崔珞（伯玉））も続いて書付を書いた」と言っていて、なんとかして／日本人に重い褒美をやって書付を探し出そうとしているといえますので、（倭館）館中の人々に厳しく言付けて／ご貴殿のところにある御用の文書を深く（保管して）おくようにしてください。ただいまのようすは、士正（朴俊漢）公の話を表立つようにしてこそ順調に成し遂げられるでしょう。

2. その解説

この書簡の発信者は、「無名氏」となっているが、その内容から、乙丑＝文化2年（1805）6月22日当時全羅道長興府に流配されていた前倭学訓導崔珞（伯玉）が流配先より送ったものであることが明らかである。崔珞は、単蓼未收不首尾の咎により、享和3（1803）年より、全羅道長興へ流配されていた。

この書簡の二の部分に、「講定官（玄義洵（敬天））が新たに任命されて（東萊へ）下ったそうですが、なにとぞ、旧館守様（戸田頼母）は直ちに相接なさっておっしゃることに、」とあるが、小田幾五郎が朝鮮通信使易地行聘の現場交渉の顛末を記録した〔御用書物控（草案）〕〔対馬宗家文庫史料一紙物〔54-10〕〕をみると、文化2年（1805）6月17日の条に、「訓導入館、申聞候者、華彦弥代り新講定官敬天玄僉知十一日都出立と申来、廿二三日可致下着」とあり、また、同6月24日の条に、「両訳入館 姓名書 館守様 講定使様へ差出ス」とあり、さらに、同6月25日の条に、「新講定官下来入館ニ付 通詞家ニ幾五郎罷出祝詞共相済候上（中略）幾五郎方へ講定官 訓導相見へ申聞候者（後略）」とあって、新講定官の玄義洵（敬天）が乙丑＝文化2年（1805）6月11日にソウルを出立し、同6月23日頃に東萊へ到着、同6月25日に倭館に入館したことを確認することができるので、乙丑＝文化2年（1805）6月22日の日付をもつこの書簡は、まさしく、新講定官の玄義洵（敬天）がソウルをすでに出立し、東萊へ向かって移動している最中に書かれたものであることがわかる。

また、同〔御用書物控（草案）〕文化2年（1805）7月2日の条には、「伯玉方より極密書状相達し 大意 士正代ニ御用成熟ニ至居候段可被相答存候へハ何も滞り候事無之 又拙者拝借之公木ハ人參を以夫々御差引可申と之約束ニ候と御答へ可被下と申来り（後略）」とあって、この書簡に符合する記述を確認することができ、この書簡が文化2年（1805）7月2日に小田幾五郎のもとに達した事実を知ることができる。

この書簡の内容は、新任講定官（玄義洵）が東萊へ着任した後、倭館の旧館守（講定使）戸田頼母らと協議を始める時、通信使寛政戊午約定（1798年）をめぐって事情聴取がおこなわれるであろうが、その際に以下のように答えてほしいというものである。

- 1) 通信使易地行聘を可とする戊午約定は、すでに朴俊漢（士正）の代に確定していたものである。
- 2) 崔珞（伯玉）自身は、己未（寛政11（1799））年になって初めて東萊へ下来したのでから、戊午約定（1798年）の策定には一切関わっていない。
- 3) 崔珞（伯玉）が日本側から預かった庚申（寛政12（1800））条の公木銭は、江戸幕府所望の生人蔘の上品五六斤の調達資金として渡したものである。

すなわち、この3点を示すことにより、崔瑠（伯玉）自身の潔白を示そうとしたものであるが、このうち、1）と2）は事実を述べたものと認められるけれども、3）の庚申条公木錢一件については、明らかに虚偽の主張である。以下にその各点について、いささか説明を加えてみたい。

まず、1）については、田保橋潔（1940）pp.687-709において詳細に論じられているごとく、戊午約定が倭学訳官朴俊漢（士正）によって成立をみたことは周知の事実である。ちなみに、崔瑠（伯玉）の書簡を受け取った小田幾五郎も、その返事の中で、「（易地行聘が）朴俊漢（士正）のときに確定していたことは言うまでもないことだ」と答えている。すなわち、[御用書物控（草案）]（対馬宗家文庫史料一紙物 [54-10]）文化2年（1805）7月2日の条には、「伯玉方より極密書状相達し 大意 士正代ニ御用成熟ニ至居候段可被相答存候へハ何も滞り候事無之 又拙者拝借之公木ハ人参を以夫々御差引可申と之約束ニ候と御答へ可被下と申来り 使伏兵ニ忍び居 急々返詞申呉候様申聞候付 幾五郎より 仰迄も無之 士正節ニ相極居候事申ニも不及（後略）」とある。

次に、2）の崔瑠（伯玉）が易地行聘交渉に加わった時期についてであるが、これもこの書簡の述べるところは、事実と符合するものと見られる。すなわち、崔瑠（伯玉）が別差として到任したのは、「倭館館守日記」によれば、寛政11年（1799）8月6日のことであり、戊午約定（1798年）が成立した後である。さらに、崔瑠（伯玉）が実際に易地行聘交渉のメンバーに加わった具体的な時期については、別差の任期満了前後である寛政12年（1800）の8月末から9月頃と推される。すなわち、「御内密書物控」（対馬宗家文庫 [記録類Ⅲ / 朝鮮関係 / B/17]）の寛政12年8月24日条には、

訓導¹⁰東萊より下来直ニ入館仕 幾五郎居所へ参申聞候者 御用便り段々相延恐怖至極ニ存候 併近々之内御左右も可有之哉と夫而已相待居候 最早拙者訓導勤者 来三 四月迄ニ候得者 間もなく彼是心遣ニ候 然処当別差¹¹近々及交代上京ニ可至 就夫兼而も心入も違候哉と相見 既ニ近比迄も様々心遣いたし候様之義 各ニも御存之通ニ候得共 拙者は迄実意を以致出会諸般懇切致介抱候ニ付而者 昨今者拙者心底をも致感候哉と相見 一旦之心得恥入候機しも顕れ 却而近比ハ其身も実意を以拙者へ出合候 元来発才ニ有之善ニも早く移り悪ニも早く傾キ候氣質ニ候得者 一ヶ年中之勤ニ而日本向御時躰も少々ハ致合点 昨今者出立を替候而別差勤をも不欠御用身ニ引請候躰ニ而 拙者言ニ随ヒ何事茂無割申聞候 此前御用勤度口気時々相顕レ候得共 莫大之御用容易ニ難相談 其節々品能相しらひ置候故 前後之事共考候処 御用ニ立させか度所より 畢竟ハ事情披り見たる事哉と相聞候 就夫誠ニ恥敷事ニ候得共 今判事中内御用ニ可立者堂上堂下共ニ無之 右御用華彦 拙者兩人ニ而も何れ相済不申 さらバとて外ニ相加へ談し候程之人物差当無之候 貴様と拙者との間繕候事も無御座 打明心底をも相咄見候 右之通故此別差御用ニ差加へ候ハ、可然存候 無怨在被仰聞可被下候 是偏ニ御用向太切ニ存知候処より同官中之事迄致内評候と申聞候ニ付 私より相答申候者 御左右相待候者御同然之事御用太切ニ思召 御兩人ニ而御不足有之筈ニ候 当別差公之事委御咄被成 私ニも此間諸勤向相考候処 一ヶ年ニも相成候ニ付 一寸日本向ニも為被馴哉と見請候 御同官中之儀御懇話有之 此人如何ニ候哉と御談し申程之人先ハ心附無之 当別差公之儀ハ其元様たに差支無之候ハ、

¹⁰ 朴致儉（景和）のこと。

¹¹ 崔瑠（伯玉）のこと。

内々御障り被遊候儀も面り有御座間敷と致恐察候 併館司様御使公へ御内意仕見可申と申候処 訓導より亦々申候者 実外二人無之 当別差上京ニも臨 殊更拙者代り訓導も可相勤模様ニ候間 右之通致了簡候事故 御内意申上呉候様申聞候 言下ニ別差入来仕 訓導見掛 幾五郎方へ参り当話済や不済 訓導より別差事御用ニ相加へ如何可有之哉と新ニ申聞候故 如何様可然事ニ被存候 併館司様御使公へ右介相談 御内意可申上と申候ニ付 訓導より右介相招キ御両所より宜敷御内意被下候様委申候 別差身分無御障思召候ハ、府使へハ勿論都表華彦方へも申越 其筋ヶえ申入候様可致候間申聞 先安心仕候躰ニ而後方可致対面と申聞罷帰り申候

右之通別差相咄候故書載仕 奉入御用控候 以上

八月廿四日

小田幾五郎

吉松右介

とあり、訓導の朴致儉（景和）より、別差の崔瑠（伯玉）を易地聘礼交渉のグループに加えることについて小田幾五郎に打診し、館守ならびに御使に「内意」申し上げるよう要請している。また、同書同年9月11日の条には、

訓導亦々申候者 右御用士正引統私華彦承り居候得共 若も病氣彼是之節甚以心遣ニ有之御用太切ニ存候所より頃日別差事兩人へ相咄候ニ付御承知可被下候 近來前方と違心入共宜見請 殊更同官中右御用可勤程之人面り無之 年輩等も段々宜相成候間 同前相勤度段相咄候処 御聞宜キ模様ニ而大ニ仕合申候 何れ近日内同道仕緩々と可申上との趣相述 饗應相済罷帰り候事

とあり、また、同書同年9月晦日の条には、

旧別差伯玉崔僉正下来 館司様為御暇乞何角御礼申上候事 伯玉より私儀不省之身分重大之御用掛ニ相加り 誠ニ誠心を尽し相働キ可申段呉々申上 頃日右御挨拶ニ罷上候得共 尚又出立ニ臨是等之儀咄咄申上罷登候上 華彦相談し御順便相尽し可申候 且頃日訓導心附之品有之 都表へ飛脚差立候日積凡今明日相達候筈ニ御座候付 府使へ申出下地委兩人より相咄申候間 二日ニ者訓導下来持参可仕段申上候事 館司様より右ニ應シ御返答有之とあり、この時期に崔瑠（伯玉）が易地聘礼交渉のグループに加わった事実を確認することができる。

最後に、3)のいわゆる庚申条公木錢一件について、調べてみよう。この庚申条公木錢一件につき、田保橋潔（1940）p.725は、

「講定訳官朴俊漢に交付した銅二千斤、同崔瑠・崔国禎に交付した公木二百九十一同余については、対州藩は単に取引上一時の融通に過ぎないと主張し、朝鮮国は之を以て賄賂の意味を有する贈与と認めて居る。恰も現代に於ける瀆職事件に類するものがあるが、朴俊漢等の死亡者を除き、両崔等はいづれも収賄の事実を自白して居るので、対州藩の主張は根拠なきものと云はなければならない。然れども朝鮮国が対州藩主及び関係藩吏を逮捕審問する権限なきを幸として、飽くまで贈賄の事実を否定し、遂に表面上対州藩に何等不正の行為なく、講定訳官が同藩を欺いて、多額の物貨を騙取し、その代償として、偽造書契を交付したと云ふ架空の事実を成立せしめるのに成功した。」

と述べ、賄賂と断定している。しかしながら、崔瑠（伯玉）が小田幾五郎に極秘裏に送ったこの書簡において、「庚申条の公木錢を私が預かって個別に処理したのですが、そのお金を私が「みやげ」にもらって御用に加わったと（朝鮮側では）疑っております」と述べており、当事者間の連絡においても、なお、賄賂として受領したのではなく、預かったと言っていることから、少なくとも対馬藩の立場からすれば、賄賂と断定するのは早計のように思われる。

そもそも、この庚申条公木錢一件については、対馬藩から働きかけたものではなく、崔珣（伯玉）の強い要望に始まったものである。対馬宗家文庫の一紙物史料の中に、壬戌享和2年（1802）3月および5月に崔珣（伯玉）らが差し出した庚申条公木錢拝借の依頼覚書があるので、以下に掲げる。

対馬宗家文庫史料一紙物 [815-6-2]

覚

- 一 僕等職在『隔』両邦周旋之任〔議聘公幹雖爲『隔』両邦周旋〕每事不無用費成事之道。＜故自初至今 自辨所費其數不少 而來頭所幹亦當預慮然此等說話極為歉愧而第念＞ 近来『隔』貴國木代磨勘之三年 陳置使同死花之盈階 庚申条公木三百同 手標為先出給於僕等使之長袖善舞 而今年秋採後 辛酉条磨勘依例入來則 木代収殺自為翌年 而周旋所費自出於其中 真所謂不費之惠 僕等生光千萬幸甚 而右者手標四五年自有區處事

壬戌三月二十七日 伯玉 崔同知 〔印〕

華彦 崔僉知 〔印〕

景和 朴主簿

舊館司 尊公

対馬宗家文庫史料一紙物 [815-6-3]

端裏書：公木借之

扣

覚

- 一 議聘公幹雖爲『隔』両邦周旋 每事不無用費 而後成事之道 故自初至今 自辨所費其數不少 而來頭所幹亦當預慮 然此等說話極為歉愧而第念 近来『隔』貴國入送木代磨勘之三年 陳置使同死花之盈階 庚申条公木未収三百同 肆拾伍疋拾柒尺 手標為先出給於僕等使之長袖善舞 而今年秋採後 辛酉条磨勘人蔘依例入來則 木代蔘収殺自為翌年 而周旋所費自出於其中 真所謂不費之惠 僕等生光千萬幸甚 而右者手標公幹完成之日

自有區處事

壬戌五月二十一日 〔右〕 伯玉 崔同知

〔右〕 華彦 崔僉知

〔右〕 景和 朴主簿

すなわち、朝鮮から対馬へ支給すべき公木が3年間分滞っており回収不能となっているが、そのうち庚申年（1800）条の公木300同余りの分の手形を支給してくれれば、その中から易地行聘推進のための運動資金を捻出できる、この未収分の公木は対馬藩にとってはどっちみち回収不能の不良債権であるので、その手形を支給したとて、誠に「費やさざるの恵み」、つまり、費用をかけることなく恩恵を施すことができるものである、なお、その手形は易地行聘成就の暁には区処（個別に処理）、すなわち、易地行聘成就の功績を勘案・相殺して処理してほしい、という内容である。

この崔瑠（伯玉）の庚申条公木錢拝借の要求は、戸田頼母および中川奥右衛門により直ちに対馬藩へ伝えられ、許可された。「文化信使記録 御国書留」慶應冊子番号一¹²の壬戌享和2年（1802）6月1日条には以下のようにある。

講定方差急候事情 先達而より追々御用掛之判事共より頼母迄申出候塩梅も有之候処
去冬〔移〕

上使御位階并朝鮮王来翰御請取方之両事被仰出 則及御掛合候処 無滞順便ニ至候
就夫御用掛判事共より申出候様子を以者 兎角都表より講定官罷下御用向表ニ打出し
取計候様無之候而者 御丈夫と申ニ難至事故 此儀至而不容易候得共 掛り之判事共
踏わたり差働 順便ニ至候得者 此上之安心ニ付 今程専周旋仕居候処 都表之模様
も順便ニ有之 則其次第此節真文を以申出 右ニ付而者 彼国之風習ニ而 彼是用費
夥敷 自力ニ而之償難相届 不得已公木拝借之義 書付を以願出 右両通之真文戸田
頼母より差越 中川奥右衛門よりも同様之趣申越候 公木之儀 御繰合第一之品不容
易段者勿論ニ候得共 御用向弥此節彼国表向打出しニ相成候得者 此上之御丈夫ニ至
候事故 則願之事情御取揚被下 庚申条未収公木貳百九拾壹束三拾七疋貳尺貳寸之分
拝借被仰付候旨 頼母方え監物より及差図 奥右衛門方え右同様之趣及達

但 真文ニ者三百束四拾五疋拾七尺と有之候処 此元ニ而御勘定所及吟味候員数と
喰違有之 其次第頼母方えも申越 渡方之儀 代官方え可被申越旨 御勘定奉行所
え相達

右之次第江戸表大森繁右衛門幾度格左衛門方え申越 真文写をも差越

- 一 今此公幹中講定官差出下来之道 尤為重
難 而〔隔〕兩國之大事遷延歲月極為悶迫故 與
華彦崔僉知 景和朴主簿 傾渴謀策 殫盡死
力 講定官從速下来期於周旋 而近見京奇
則 公議順便 如是書付 勿為関慮千萬幸甚

壬戌五月二十一日 伯玉 崔同知 印

舊館守 尊公

右真文和解

¹² ゆまに書房マイクロフィルム第56リール所収。

覚

- 一 講定官差下方之道 格別手入之儀と存候 併兩國之
大事多年及遲滞候段 当惑千万之事に候得者 華彦
崔僉知 景和朴主簿同然心力之限示談いたし
講定官早々下来ニ相成候様 専周旋いたし居候 尤近比
都便り有之候処 朝議順便ニ御座候 少しも御氣遣被成
間敷候

壬戌五月廿一日 伯玉 崔同知

旧館守 尊公

覚

- 一 議聘公幹雖為『隔』兩邦周旋 每事不無用費
而後成事之道 故自初至今 自辨所費其數
不少 而來頭所幹 亦當預慮 然此等說話極
為歉愧 而第念 近來『隔』貴國入送木代磨勘
之三年 陳置使同死花之盈階 庚申条公木
未収參百同肆拾伍疋拾柒尺 手標為先出
給於僕等 使之長袖善舞 而今年秋採後 辛
酉条磨勘人參依例入來則 木代參収殺自
為翌年 而周旋所費自出於其中 真所謂不
費之惠 僕等生光千萬幸甚 而右者手標公
幹完成之日 自有區處事

壬戌五月二十一日 伯玉 崔同知

華彦 崔僉知

景和 朴主簿

右真文和解

覚

- 一 議聘御用之儀者 専兩國之周旋事と申内 每事用費
無之候而者 難成事ニ而御座候 初発よりは是迄内證にて
相談候筋 不一形儀ニ候得者 此以後之処 是又兼而心遣致置
不申候而難叶事候 夫ニ付此等之儀申出候者 甚如何敷儀ニ
存候得共 近來貴國え入送之公木代參三ヶ年分未収ニ
相成居候内 庚申条未収三百同四拾伍疋拾七尺まつ
我々手形御出被下候ハ、 夫を以用費取償 今年秋參
出立候上 辛酉条未収參入來候処ニ而 翌年之分ニ相立テ
候得者 右御用之用費者其内より出候と申ものにて 我々
大ニ仕合申儀ニ候 素り右当分御渡被下候手形前ハ 御用
成就之上 夫々取しらへ方有之儀と存候

壬戌五月廿一日 伯玉 崔同知

華彦 崔僉知

景和 朴主簿

この庚申条公木銭の手形は、壬戌享和2年（1802）6月18日に実際に崔瑠（伯玉）に交付された。「御内密真文扣」〔記録類Ⅲ - 朝鮮関係 -B-14-3〕にはそのときの受領覚書の写しが収録されている。

同日我々迄差出候手形 旧館守様へ差出置扣

覺

一 庚申条公木貳百玖拾壹同参拾柒正貳尺

柒寸

右者公幹浮費所用次 同手標取用 而

公幹完結後 自有區處事

壬戌六月十八日 伯玉 崔同知 印

華彦 崔僉知 印

景和 朴主簿

小田幾五郎

牛田善兵衛

吉松右助

僉公

ところで、上に掲げた壬戌享和2年（1802）3月27日付の庚申条公木銭拝借依頼覚書（対馬宗家文庫史料一紙物〔815-6-2〕）の差出人は、崔瑠（伯玉）・崔国禎（華彦）・朴致儉（景和）の3名になっているが、崔瑠（伯玉）・崔国禎（華彦）の2名については押印があるのに対し、朴致儉（景和）には押印がない点が注目される。また、「御内密真文扣」〔記録類Ⅲ - 朝鮮関係 -B-14-3〕に収録された、壬戌享和2年（1802）6月18日の受領覚書の写しにおいても、崔瑠（伯玉）・崔国禎（華彦）の2名には押印の表示があるが、朴致儉（景和）については押印の表示がない。これは、この時期、朴致儉（景和）が上京して東萊にいなかった¹³ためでもあるが、崔瑠（伯玉）・崔国禎（華彦）両名が、朴致儉（景和）の了解なしに、庚申条公木銭拝借の件を推し進めたことによるものと思われる。

「御用書物扣」（通詞小田幾五郎倭館にて訳官と申談候記録）〔記録類Ⅲ - 朝鮮関係 -B-55〕の癸亥享和3年（1803）3月3日（あるいは2日か？）の条に、

景和後ニ残居三人え相尋申候者 先刻公木拝借と被申聞候者 如何之事ニ候哉と申候ニ付 我々より其事御上京之節御聞不被成候哉 扱々驚入候事ニ御坐候 右御用〔御尽?〕被成候付 伯玉公 華彦公 其元様 三名ニ而 公木参百束餘御拝借被成候 伯玉公より御通し無くと申候〔?〕者不相済事ニ候と申候処 いや今日迄何之事も不承 尤頃日講定使様ニ而幾五郎より公木之事聞候哉 米貳拾俵銅手洗壺組之事聞候哉と者申聞候得とも其〔折?〕者気分も不宜委敷問合不申 不思議之事と一ト通存候而已ニ御坐候 夫者誠ニ不存寄事ニ御座候 御用を相働候もの事成熟之上者 〔隔〕上より思召有之事ニ候 其前少しニ而も拝借等之事 不面白筋ニ候と申候付 米貳拾俵者 〔隔〕御国より御目録承り候事ニ御座候か 近〔年?〕も相滞候哉と申候得者 如何様夫ハ無相違相達居申候ニ付 然者其儀御礼被仰出可然事ニ候を 御失念と相聞候

¹³「御内密書物控」〔記録類Ⅲ - 朝鮮関係 -B-14-2〕に拠れば、朴致儉（景和）は、享和2年（1802）3月5日に上京した。朴致儉（景和）が再び東萊へやってきた日付については、史料によって記述が異なるが、朴致儉（景和）自身が書いたハングル書簡である対馬宗家文庫史料一紙物〔41-16〕（対馬歴史民俗資料館編（2015）の史料31）が事実を伝えていると思われ、それに拠ると朝鮮暦の癸亥2月27日・和暦の享和3年（1803）閏1月27日である。

[?]之節御急被成間敷と申置候事

華彦を幾五郎居所へ呼寄 我々三人相談申候者 公木拝借之儀如何ニ而今日迄景和公へ御咄不被成事 不審之儀ニ御座候 景和公者此事多年之相働 拝借之出来にも右専之筋より相叶候事ニ御坐候と申候処 華彦相答候者 右公木之儀 伯玉不残受込ミ是を以講定官も被差下 古館守様ニ而講定相済候様相成 右講定官下来之一儀ニ付誠ニ夥敷費有之 其身も右之成行ニ相成候事故 伯玉受込候 [分?] 拙者より相申し可申様無之と申候ニ付 又々我々より何れ伯玉公より御咄し有之様御計可被成候と申候処 罷上り候上委く相申し可申段申聞候事

とあり、新講定官として東萊に赴任した朴致儉（景和）がその間庚申条公木錢拝借一件について知らされていなかったことが判明したため、小田幾五郎が崔国禎（華彦）に問い詰めたところ、「その公木錢は崔珔（伯玉）がすべて預かりその工作資金によって朴致儉（景和）は新講定官として赴任することができたのだ」等と返答したことが記されている。この記述により、庚申条公木錢拝借一件は、易地行聘交渉の朝鮮側のグループの上司に当たる朴致儉（景和）にすらも報告することなく、崔珔（伯玉）・崔国禎（華彦）両名の独断専行により進められたものであったことがわかる。

この庚申条公木錢拝借一件については、上の崔珔（伯玉）のハングル書簡においても「庚申条の公木錢を私が預かって個別に処理したのですが、そのお金を私が「みやげ」にもらって御用に加わったと（朝鮮側では）疑っております」と述べているごとく、朝鮮側から疑惑の目が向けられるようになった。崔珔（伯玉）の書簡が小田幾五郎のもとに届くよりも一足早く、新講定官の玄義洵（敬天）が到任したが、早速倭館へ出向き、庚申条公木錢一件についての調査を開始した。〔御用書物控（草案）〕（対馬宗家文庫史料一紙物 [54-10]）文化2年（1805）6月29日の条には、

々善兵衛病氣ニ付 兩人¹⁴共ニ彼方ニ而委く御嘶可申と 幾五郎より申候ニ付 彼方へ参り候上 講定官より申候者 公木之書付御吟味被下候哉と申候ニ付 則是ニ致持参御覽可被成候 控を為見候内 御代官方より請取之節差出有之書付之写 青柳孫七より遣候付 此通り之事ニ候と申候処 兩人より申候者 前訳ニ差出候書付よりハ此書付たりと有之 先者宜キ事ニ候 委キ書付 [ハ?] 先見合可申と申 穩ニ取扱候振合と相見候 引続兩人より申候者 士正ニも公木百束拝借有之 銅貳拾称拝借も有之たる哉ニ聞へ居候 其書付も可有之 御尋可被下と申候故 幾五郎より相答候者如何様公木百束計も御受取為被成模様粗承候 乍去此事者已前被執之代銅余計ニ滞り居候内 士正之受取高第一と相聞候 其等之事情渡海官之節勘定所ニ毎々被申出 判事中難儀之事情難被成御見捨 右百束ニて被執之未極只之分全く御済ニ相成候との様ニ承り候 此方ニ不拘筋委細不存候 銅貳拾称之事ハ渡海官ニ付存外之物入有之 勘定所ニ内々願ひ有之 帰鮮之上又々下来候ハ、 人参二十斤共 又者 紬木綿之類之品ニ而 返済可致と有之 其後追々入送ニ至り候哉と存候 是等之取引勘定所代官所之事ニ而 是又委細ニ存し不申と答候処 兩人より丁度咄之通 旧被執之筋ニ而 百束被受取候との噂も有之 銅も差引ニ相成居候ハ、 夫等之書付御穿鑿被下候道共ハ無之哉 右之通ニ候へハ 士正之云分貫キ可申候 拙者共先官之事死後ニ而も汚名を為蒙候者 好候事ニ無之候と申候付 最早年も経ち候上 死後之事ニ付 当所ニ扣可

¹⁴ 講定官玄義洵（敬天）と訓導玄斌（陽元）。

有之様もなく 御勘定所仰向洪難之儀ニ候へハ 急々御穿鑿も届間敷考候と申置候事

御用成熟之条々都表にて追々御承知も可被成候へ共 為念完定之分 詳ニ見へ候様是ニ一点を以致書載候 寛々御覧可被成候 起りハ則是ニ御座候易地省弊御書翰之往復是ニ候 其外追々之条々御引合御覧可被成候 訓導引合ニして不殘〔後?〕之分為見申候所 兩人共委致披見 何れにしても是を以論し候事等に至り候而者 不相濟儀ニ候と申聞ケ 別而為相変体も無之 暫して幾五郎より兩人へ相咄候者 公木拝借之事此度第一ニ御尋被成候者 如何之御底意ニ御坐候哉と申見候処 講定官より士正景和 伯玉 華彦 此銘々御用之儀右之通ニ御掛合仕 此通之事ニ候 士正 景和者古人ニ相成居 後兩人首尾合不宜候 他国之財物を公用ニ託し 其身共得徳ニ致し候者 誠信之間不相濟事ニ付 朝議有之候者 他国ニ対し我国之者不埒筋ニも不存冥キ国等と被汲取候而者 誠信之道不安事ニ候との朝議ニ決し 此筋を明白ニ調へ候様ニとの儀ニ候と申候付 幾五郎より頃日も訓導公へ御咄し申候通 前任之人之事此方より無〔御座?〕取計候体ニ至り而者 御一統之為ニも如何敷被存候 右伯玉公 華彦公御兩人之儀 萬々曖昧ニ而死罪等と申ニ決候時ハ 此方様よりも御掛合被遊候儀も可有之哉と致恐察候 其訳者は迄追々御極被遊候手継を致し候人之儀も御坐候へハ御極メニ相成居候条 生前へ御引合可被置事哉と考候 此方ニ而者 何も角も貫通致し無此上御安心ニ御座候 乍去今之俣無事〔?〕御掛合ニ不至事〔?〕相願候と申候所如何様其通りニ候と兩人共ニ相答 問も無く訓導一人御代官方へ参り 後ニ而講定官相咄候者 先刻貴様之咄尤ニ存候 訓導者景和之事を厭ひ只順便ニと候得共 朝廷之本意先刻申候通り御誠信通候様ニ被存候内ニ 右之銘々多数之拝借いたし候との噂都ニ聞へ 様々疑心も生候へ共 其筋を糺し候上 速ニ相成可申 朝廷之朝議者十二して八九順路ニ決し居候 左も無之時者 我国之者他国を欺キ候と申もの 一国之恥辱ニ至 両国間無此上大切之場無之段能々相貫キ居候 此等之事慥ニ有之候ニ付 拙者罷下り 御用不順之機共見へ候へハ 拙者罷下おめ々々と相勤可申哉と 爰を以御察し可被下 萬々御手入之事ニ至り候ハ、先拙者を貴様達手ニ掛可被申 土台を氣遣不被申様ニと存候へ共 訓導へケ様之事迄申候而者 餘り打明ケ不宜 態と大切そふニ為見掛ケ居候 貴様方強キ事をも被申候も随分宜有之候 内チ々へ少しも不拘様して相働丸メ可申と申聞候事

とあり、講定官玄義洵（敬天）と訓導玄斌（陽元）に対し小田幾五郎が公木拝借の書付を見せたことが記されている。小田幾五郎が公木拝借の書付を講定官玄義洵（敬天）らにあっさりと見せてしまったのは、崔瑠（伯玉）のハングル書簡を受け取る前であったことと、対馬藩としてはあくまでも崔瑠（伯玉）の求めに応じた一時の貸借に過ぎないので、大きな問題にはならないだろうと考えていたからであろう。小田幾五郎は、崔瑠（伯玉）の書簡に対する返事の中でも、「公木のことは代官所の書付にも「後日区処（個別に対応）すべしとあるから心配ない」と答えている。すなわち、〔御用書物控（草案）〕（対馬宗家文庫史料一紙物 [54-10]）文化2年（1805）7月2日の条には、「伯玉方より極密書状相達し 大意 士正代ニ御用成熟ニ至居候段可被相答存候へハ何も滞り候事無之 又拙者拝借之公木ハ人參を以夫々御差引可申と之約束ニ候と御答へ可被下と申来り 使伏兵ニ忍ひ居 急々返詞申呉候様申聞候付 幾五郎より仰迄も無之 士正節ニ相極居候事申ニも不及 此方様二者少も御惡意無御坐候 公木之事ハ則後日可被致区処と代官所方之書付ニ御坐候 御氣遣被成間敷と申遣候事 委状ニ有之 略之」

とある。

しかし、小田幾五郎の予想に反して、この庚申条公木錢一件に対する疑惑が発端となって、その後いわゆる書契偽造の事実も発覚し、易地行聘交渉は一大頓挫をきたすこととなった。講定官玄義洵（敬天）からの報告を受けた朝鮮政府は、同年7月6日に承政院同副承旨尹命烈を東萊府按覆使に任命し、調査に当たらせることとした。8月に東萊に赴任した尹命烈は崔珔及び崔国禎らを配流先から呼び戻して盤覈した。すなわち、以下の史料の伝えるごとくである。

尹命烈下來、全羅道長興定配譯官崔珔及咸鏡道明川定配譯官崔國禎等、自刑曹、發羅杖押來究覈、其前後所犯情節、則庚申條公木代錢二萬三千餘兩、通聘事用情周旋次、兩譯、同爲手標貸出、其中七千兩、國禎取用、一萬六千餘兩、崔珔取用、的實是白遣『辺例集要』下、卷之14、雜犯、乙丑

朴俊漢・朴致儉・崔珔・崔國禎・金亨禹等五譯、自乙卯至乙丑十一年之間、馬島通聘事、書給手標、禮曹・東萊・釜山書契、偽造書給情節、一一綻露自服、同偽造書契、書給本府居朴潤漢、偽造圖書、刻給商賈金漢謨、使喚通事金武彦等罪狀、亦爲查覈、並與前後文蹟、謄書別單馳啓

『邊例集要』下、卷之14、雜犯、乙丑、および『承政院日記』純祖5年8月28日条文化2年（1805）閏8月9日・10日には、講定官玄義洵（敬天）と訓導玄斌（陽元）が營吏と衙前を伴って倭館を訪れ事情聴取をおこなったが、そのとき、小田幾五郎は、「公木の件は、当時訓導であった崔珔（伯玉）が、朝鮮から対馬へ支給すべき公木が滞っているが、その回収不能となっている分の手形を支給してくれれば、やりくりして追々返済すると言うので貸したものである。」と述べ、上掲の壬戌享和2年（1802）3月および5月に崔珔（伯玉）らが差し出した庚申条公木錢拝借の依頼覚書の内容と一致した弁明をしている。すなわち、対馬宗家文庫「乙丑年閏八月掛合」〔記録類Ⅲ／朝鮮関係／A-①／16〕¹⁵には、以下のようにある。

彼方聞書大意覚

銅二十称士正朴僉知被致借用候事為有之と覚へ候 其後對州勘定所え返済為有之と承り候 公木參百束之事者 其節伯玉訓導ニ而 年条之公木相滞居候ニ付 死貨を以差操置候得者弁利ニ有之 此先キ追々返済可致との事ニ候 餘り委敷御尋ニ付一向手近ク可申述候 戊午年之書契公義え差上有之 是ニ付候公幹少ニ而も相滞候而者對州興亡ニ拘り候へ者 よしや參百束四百束死貨を以借渡 何ぞ屈托無之事ニ候

附り右掛合中彼方より伯玉 華彦公幹之浮費有之致借用候と申たる趣 毎々申聞候ニ付 我々より其身者如何様ニも可被存 我々ニおゐてハ左様ニ者不存候 殊更乙卯年以来順成ニ至り〔居候〕 公幹今ニ至り浮費と申へく様無之 併戊午年 公義え御書契差上有之 重大之御用少しニ而も相滞候而者國之大事兩國間之為候間 參百束四百束借し渡し有之共 御不審被下候儀ニ無之 其上死貨の事言に不及候と 打合候付 大意前条ニ有之

彼方聞書大意覚

公木參百束借受られ候砌 我々より紬類之反物被送候様為申との説 誠ニ恥敷事ニ候 左様無心申了簡ニ候ハ、 其内四 五十束又者百束も御借し可被下と可申事ニ而者無之候哉

但取食事語不成説ト云有之

¹⁵ 国史編纂委員會所藏対馬宗家文書〔古文書10746〕も、これと同様の内容を持つ史料である。

おわりに

本論文においては、このたび新たに発見された対馬宗家文書ハングル書簡類の中から、いわゆる受賄売国の奸訳とされる倭学訳官崔瑠（伯玉）が、処刑される2か月余り前の文化2年（1805）6月22日に流配先の全羅道長興府から倭館の朝鮮語大通詞の小田幾五郎に宛てて送った極秘書簡を紹介し、その内容および庚申条公木錢一件などいくつかの関連事項について吟味した。従来、文化年間朝鮮通信使易地行聘の研究は、朝鮮側の官撰記録に頼りすぎるきらいがあり、結果的に奸訳としてレッテルが貼られた倭学訳官崔瑠（伯玉）らの当事者の視点や、小田幾五郎など最前線で実際に交渉に当たった対馬側担当者の視点が欠如していたように思われるが、このハングル書簡がそのような欠を補う資料的価値を有するものであることを示しえたと思う。対馬宗家文書ハングル書簡類についての研究は、今まさに始まったばかりである。今後、この貴重な資料に対する研究がさらに深化することを願う次第である。

参考文献

- 長正統（1978）, 「倭学訳官書簡よりみた易地行聘交渉」, 『史淵』 115, 95-131, 九州大学文学部
- 岸田文隆（2015）, 「対馬宗家文書ハングル書簡類について—報告書の刊行を契機として—」, 『朝鮮学報』 237, 1-63, 朝鮮学会
- 田保橋潔（1940）, 『近代日鮮関係の研究』 下巻, 朝鮮総督府中枢院
- 対馬歴史民俗資料館編（2009）, 『対馬宗家文庫史料—紙物目録』（1）～（3）, 長崎県教育委員会
- 対馬歴史民俗資料館編（2012）, 『対馬宗家文庫史料絵図類等目録』, 長崎県教育委員会
- 対馬歴史民俗資料館編（2015）, 『対馬宗家文庫史料—朝鮮訳官発給ハングル書簡調査報告書』, 長崎県教育委員会

**The negotiations for change of places of reception for Korean envoys as
seen through the Hangul letter written by the official Japanese
interpreter Choi Gyeong (Baek Ok).**

KISHIDA Fumitaka

This study introduces the confidential letter newly discovered from the Tsushima Sōke Monjo Hangul letters, written by the official Japanese interpreter Choi Gyeong 崔瑠 (Baek Ok 伯玉) and addressed to the official Korean interpreter Oda Ikugoro 小田幾五郎 at the Wakan, which was sent from Jeolla Do Jang Heung Bu 全羅道長興府 on June 22nd 1805, about 2 months before Choi Gyeong (Baek Ok) was executed for bribery, and together with the content of this confidential letter, this study examines closely several related matters such as the so-called Gyeong Sin Jo Gong Mok Jeon incident 庚申条公木錢. In the preceding study, it was argued that in the Gyeong Sin Jo Gong Mok Jeon incident, Choi Gyeong (Baek Ok) was convicted of bribery based on material provided by the Korean side, and that the claim of the Tsushima Domain, that the money was merely provided temporarily in the process of the transaction, was dismissed as having no grounds. But, as the Hangul letter that served as correspondence between the provider and recipient of the Gyeong Sin Jo Gong Mok Jeon incident also stated that “(the money) was just being kept in my possession (and not received as bribery)”, there still is ground for reconsideration. In the past, studies on the change of places of reception for Korean envoys tended to rely too heavily on official records of the Korean side and seemed to lack perspectives of the official Japanese interpreter Choi Gyeong (Baek Ok), who was in the end, labelled as a criminal and Oda Ikugoro, who was the person in charge on the Tsushima Domain side and at the forefront of the actual negotiations. Therefore this study notes that this Hangul letter has value as a source that compensates for such shortcomings.